

《第 535 回(2026 年 5 月 14 日) 子どもの本の読書会記録》参加者:11 人

時間:10:00~11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『ムーンレディの記憶』 E.L.カニグズバーグ/作, 金原 瑞人/訳 岩波書店

5 月は、『ムーンレディの記憶』を読みました。転校生のアメディオは、隣に住む風変わりな老婦人・ゼンダー夫人の大邸宅で、家財処分の仕事を手伝い始めます。そこで見つけた 1 枚の絵画「ムーンレディ」に隠された背景が明らかになっていきます。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

●ゼンダー夫人は風変りな人物で、最初は認知症なのではないかと疑ってしまっただ。小学生が高級品の多いゼンダー一家の家財処分の仕事をする場面はハラハラした。p.169~p.170 の画家について詠んだ詩の内容に共感できた。

●カニグズバーグの作品が好き。最後にゼンダー夫人はアメディオに何をしてほしいのか。生き残った人が罪に問われるが、何が正解なのか？ナチスによる迫害の歴史から、今の戦争や現実の問題に気がついてほしい。

●子どもとの接し方が分からないアメディオがウィリアムと子ども同士の友情を育んでいく。ムーンレディを盗んだアメディオの心の裏の機微、好奇心が物語の軸になる。今作の登場人物は『スカイラー通り19番地』(E.L.カニグズバーグ/作, 岩波書店)にも出てくるので、読んでみて欲しい。

●モディリアーニは若くして亡くなった画家で、死後に作品が評価された。調べてみたが、ムーンレディは実在しない作品のようだ。元ナチス党員がオーストリアの要職につくが、過去は簡単に隠せるものなのだろうか？と不思議に思った。

●90%と10%の境界について考えた。ナチスのした行いは、後世に伝えていく必要がある。芸術が政治の好みで線を引きかれ無ないように、警戒していきたい。著者が80歳でこんな画期的な文章を書いたことに驚いたと同時に、自身の励みにもなった。大人が子どもたちに「この本を読んだらいいよ」と伝えることも大切。

●アメディオの生活とナチスの話に挟まるムーンレディの存在に違和感を感じた。ナチスのラベリングやユダヤ人迫害は、人間と人間でないものをはっきりと分けてしまう。

読後にもやもやが残ったので、もし作者が存命だったらこの本について詳しく聞いてみたかった。

●最後に物語が全部つながる。2回読むと、伏線に気がつけた。ヨーロッパのジョークの内容がいまいち伝わってこない場面があった。作中の元ナチス党員が、ビクビクと隠れて過ごしているのが印象に残った。

●本・絵は作者の手を離れてみんなが受け取った時点で後世に残るものになる。「人の90%は見えていない」という一文に、目に見えていないもののほうが大切なものがあるんじゃないかと考えさせられた。

●まだ読み切れていないが、前回の『消えたモナ・リザ』と同様に良い本だった。読書会では、豊かな本との出会いがある。自分では手に取らないような本も多いが、たくさん本に触れ、自分の孫たちにも手渡していきたい。

●様々な人物が登場するので、名前が覚えにくかった。最初は2人の少年の物語と思っていたが、「ムーンレディ」からナチスに関する真相が明らかになり、話の入口と出口の広がりの違いに驚いた。

●強烈な個性で読み手を惹きつけるゼンダー夫人。ラストには思うところがあるが、ナチスの夫を持つことを自分に置き換えると一方的に非難できない。世界で戦争が起きている今、この本を読めて良かった。このカニグズバーグの本が、子どもたちが過去を知るきっかけになって、今を知ることに繋がると良いなと思う。

次回 6月11日(木)10:00~11:30 オーテピア 4 階集会室

□『銀のキス』 アネット・カーティス・クラウス/作, 柳田 利枝/訳 徳間書店

※申込み・参加費は不要です。